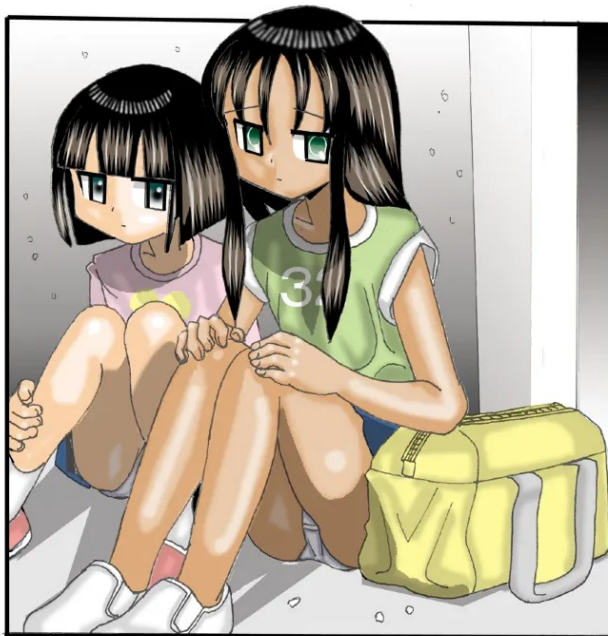




家出姉妹

家出娘を孕ませる！



○月○日
 派遣切りされ無職になる。
 むしゃくしゃした気持ちで駅を出ると
 大きなカバンを横に座り込む少女二人
 を発見する。
 いつもなら無視して通り過ぎるが、その日は
 なんとなく声をかけてみたくなった。
 慎重に近づき声をかけてみた。
 はじめは警戒していたが行くところも無く
 腹も空いていたらしく、こちらの話にうまく
 のせることが出来た。

「あたし詩織ってゆうの。こっちが妹の麻子。」
 とお姉ちゃんが言った。
 俺は思い切って家へ来ないかと誘ってみた。
 詩織ちゃんが無垢な瞳でこちらをじっと見た。
 俺はドキドキした。
 「いいよ、おじさ…お兄さん。」
 俺の胸はさらに高鳴った…



コンビニに寄り買った弁当を食わせ
ら、俺は詩織を引き寄せた。

のこのこついて来たのが運のつき。
かんねんしたのか、覚悟していたのか
お姉ちゃんは案外おとなしい。
たいして抵抗もなく、少しがっかり
したような、手間が省けたような：

うん？やっぱり少し怯えているようだ。
小さな体が少し震えている。

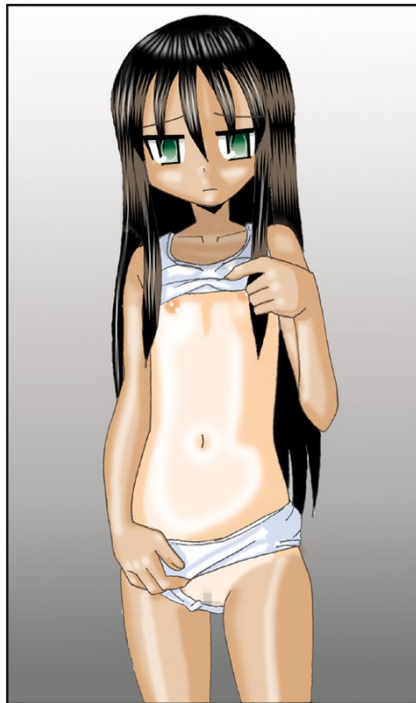
しかし、たまらないな。黒髪の匂い、
大人とは違う甘い香り…

シャツの上から胸をまさぐってみた。
どうやら中にインナーを着ているようだ。
それでも平らだが柔らかくすべすべした
感触と乳首の突起を感じられた。

詩織は黙って耐えていたがパンツに手を入れた
時はさすがに少し抵抗してみた。
だが俺は構わず奥まで手を伸ばした。

そこは暖かく少し汗ばんでいた。俺はしっかりと
閉じているすじをそっと開いて隠れていた花肉を
弄んだ。

詩織は時々「ううん…」と幼い声をあげた。



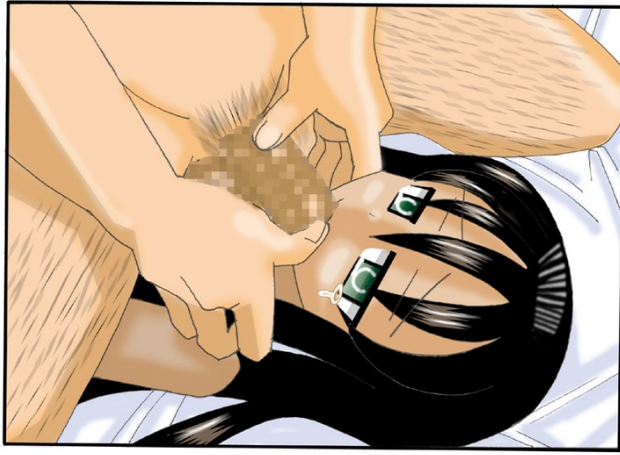
俺は詩織をインナーだけにして、写真を撮った。
さらに恥ずかしい部分を詩織に自身でさらけ出させまた写真を撮った。

これで詩織も覚悟がついたろう。
それに口止めにもなるだろう。

そして俺はインナーも自分で脱がさせた。
くっきりと日焼あとが残る体は艶があり
美しかった。

俺は震える手で裸の詩織にふれた。詩織の
体は、すべすべで手に吸い付くようだ。

俺は小さくてピンクの乳首に吸い付いた。
詩織は「うっ！」と息を漏らした。
詩織の乳首は甘い少女の味がした。



俺は裸になり、詩織に大きくなったペニスを見せつけた。

かなりショックだったようで目をそらしたが、髪を掴み、ぐいっと俺の股間に詩織の顔を押し付けた。

くわえろと命令したが、拒まれた。仕方なく俺はしきっぱなしの布団に詩織を押し倒した。

そして無理やり口にペニスをねじ込むと、ゆっくりと腰を動かした。

詩織は舌がペニスに付くのが嫌らしく舌をうねうねと動かす。それがかえって俺の亀頭を刺激した。

俺はズボズボと音が鳴るくらいに腰を振った。

ゆっくりとペニスを詩織の口から抜くと唾液でべとべとになったペニスから湯気がたっていた。



俺は指で詩織の蕾をそっと開いた。
そこには、はっきりと処女膜が確認できた。

俺は詩織の性器全体を口に含むと、舌で
クリトリスをそっと舐め上げた。

詩織の体がびくっと跳ねた。

さらに花卉や処女膜を執拗に責めた。

詩織は体をくねらせ、「ううっ…」と声を
漏らした。

俺は今度は亀頭を処女膜に当て、詩織の顔を
見た。

詩織は覚悟を決めたような表情をしている
ように見えた。
俺はゆっくりとペニスを詩織の中に埋めて
いった。



すぐに、小さな子宮に行き当たった。
詩織の中は熱をおび、とても温かった。

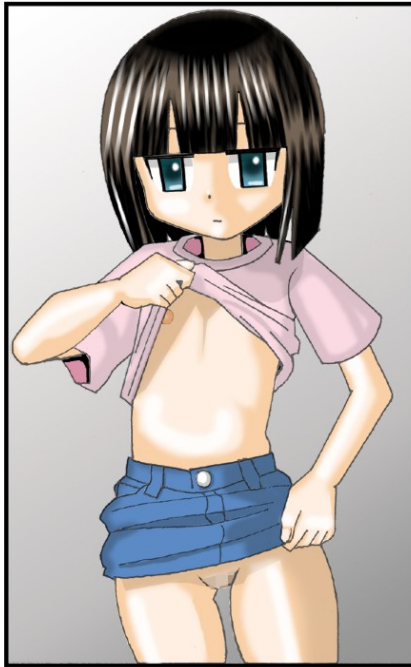
俺はその温かさに若さを感じた。

「動くよ」と詩織に声をかけると激しく
腰を振った。

詩織は歯をくいしばり痛みに耐えている
ようだった。

強いしめつけにすぐに強い快感の波が
やってきた。

俺は詩織の子宮口まで入り込み
大量に射精した。



○月○日

詩織をコンビニへ行かせた。詩織は行く前に「妹には手をださないでね」と一言残していた。

もちろん俺はそんなこと知ったこっちゃない。「お姉ちゃんと同じ事しようね」として麻子の写真を撮った。しかし妹には手をやいた。達観している姉と違い麻子は言うことを聞かない。

そこでお菓子とぬいぐるみを買ってやりなにか機嫌をとった。無職になったというのにとんだ出費だ。



麻子ちゃんにお菓子を与えついでに
ペニスもあたえる。

ぎこちなくペニスをしゃぶり、時折
こちらを見上げる姿がとても愛しい。

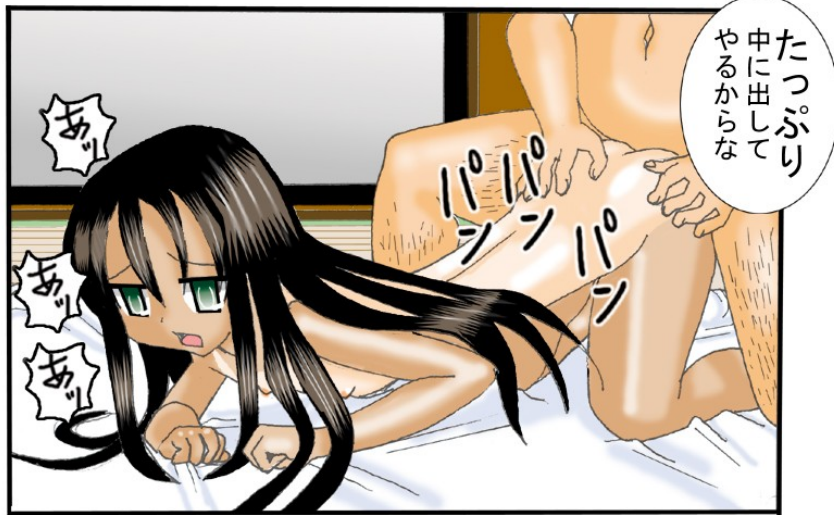


上手にできたご褒美に
首輪をしてあげる。

ペットになった麻子ちゃん
に舐をする。

あんがい大人しく俺の
ペニスを受け入れる。
とはいえペニスの一部が
入る程度。

たっぷり射精して小さな
小さな子宮を汚してやる。
これもまたご主人様からの
ご褒美だ。



買い物から帰ってきた詩織が妹の姿を見て怒る。

めんどくさいので詩織を裸にしてバックから責める。ペットにはお似合いのスタイルだ。日焼けしていない真っ白な尻を眺めながら音が出るくらいおもいつきり俺のペニスを叩きつける。

なるべく奥まで届かせてるつもりで精子を流し込む。

ぐったりとした詩織の荒い呼吸で上下する胸に大量の汗が光っている。



○月○日

ディープキスで詩織の口を
ふさぎ小さな乳房を時には
乱暴に、時には優しく
もてあそび、麻子には
ペニスを与え二人を
食い尽くす：

ああ、いったいどれくら
いの時が流れたのだろう
：



・ ○月○日
 ・
 ・
 ・
 ・
 ・













